

## 児童の動的学校画と学校適応との関連 —学校における理想と現実のずれに着目して—

稲垣美 絢

### 問題と目的

児童の学校適応を把握する有効な方法として動的学校画 (Kinetic School Drawing : KSD) が挙げられる。先行研究では学校適応を測定する尺度と KSD との関連が検討されてきた。しかしこれらの尺度は、客観的な視点から不適応とされる可能性があるため、児童自身の内的基準に基づいた測定が必要である (江村・大久保, 2012)。従って本研究は、学校における理想と現実のずれという視点から児童の学校適応を捉え、このずれと KSD の描画特徴との関連を検討する。

### 研究 I

学校における「理想と現実のずれ得点」と KSD の描画特徴との関連を検討する。

#### 方法

**調査協力者** A 県 B 小学校の 5 年生 (71 名), C 小学校の 5 年生 (86 名) と 6 年生 (118 名), 合計 275 名。

**調査時期** 2018 年 7 月に調査を実施した。

**調査内容** まず KSD を実施するよう求めた。描画終了後は、自己像、先生像、友達像はどれか、どんな場面か、何をしているか、描いた絵の場面の後どんなことが起きると思うかについて回答を求めた。次に学校生活に関するアンケートの回答を求めた。まず、学校における友達との関係、先生との関係、クラスについて、理想を自由記述するよう求めた。その方法は、信頼性が確認されている簡易版の個性記述的手法 (小平, 2005) を参考にした。続いて、各記述が現実ではどのくらい当てはまっているのかを 5 件法で評定するよう求めた。

**調査手続き** KSD 用画用紙、アンケートを学校にて配布し、自宅で回答後再び学校で回収するよう求めた。

**倫理的配慮** 名古屋大学教育発達科学研究科研究倫理委員会の承認を得て実施した (申請番号: 18-1120)。

**データの処理** 田中 (2009), Knoff & Prout (1985 加藤・神戸訳, 2000) などを参考に作成した 26 項目のスコアリング基準を KSD の評定に用いた。評定は、筆者と臨床心理士有資格者 2 名とで行った。学校生活に関するアンケートは、小平 (2005) に倣い、「友達との理想の関係」、「先生との理想の関係」、「理想のクラス」ごとに、3 つの自由記述の評定値を逆算させ合計し、記述数 3 で割った値を各側面における「理想と現実のずれ得点」とした。最大値 5、最小値 1 であり、得点が高いほど理

想と現実のずれが大きく、低いほど小さい。

### 結果と考察

分析対象者は、回答に不備のなかった 238 名 (5 年生 124 名, 6 年生 114 名) とした。分析は、「理想と現実のずれ得点」を従属変数、KSD の描画特徴を独立変数とする Welch の t 検定及び一要因分散分析を行った。有意な結果を Table 1 に示す。〈自己像と先生像の距離〉は、中・遠距離群は近距離群に比べ、先生との関係における「理想と現実のずれ得点」が高かった ( $t(53.7) = -3.59, p < .01$ )。〈自己像と先生像の大きさ〉は、自己像の方が小さい群は自己像の方が大きい群に比べ、友達との関係及びクラスにおける「理想と現実のずれ得点」が高かった ( $MSe = 0.64, p < .05; MSe = 0.85, p < .05$ )。〈自己像の区分化〉は、区分化なし・自然な区分化群は不自然な区分化群に比べ、クラスにおける「理想と現実のずれ得点」が高かった ( $t(189) = 2.91, p < .01$ )。〈友達像の有無〉は、友達像なし群は友達像あり群に比べ、クラスにおける「理想と現実のずれ得点」が高かった ( $t(4.44) = 3.72, p < .05$ )。〈友達像の身体部分の省略〉は、不自然な省略群は省略なし・自然な省略群に比べ、先生との関係における「理想と現実のずれ得点」が高かった ( $t(18.6) = 2.21, p < .05$ )。〈先生像の身体部分の省略〉は、省略なし・自然な省略群は不自然な省略群に比べ、友達との関係における「理想と現実のずれ得点」が高かった ( $t(24.7) = 6.08, p < .001$ )。

以上の結果から、先生との心的距離の遠さが自己像と先生像の距離に表れること、自己評価の低さが自己像の小ささに表れること、先生を頼りにする思いが先生像の大きさや身体省略のない丁寧な描画に表れること、クラスメイトに対する負の感情が友達像を描かないというかたちで表れることが考えられた。

### 研究 II

研究 I にて有意な結果がみられた描画特徴について、描画特徴によって理想の自由記述の内容に異なる特徴があるか検討する。

#### 方法

調査協力者、調査時期、調査内容、調査手続き、倫理的配慮は研究 I と同様であった。

**データの処理** KSD は研究 I と同様に行った。アンケートの自由記述は KH Coder (樋口, 2014) を用いて

## 児童の動的学校画と学校適応との関連

Table 1 t検定及び一要因分散分析の結果

(自己像と先生像の距離)	近距離			中・遠距離			t値	(自己像と先生像の大きさ)			自己像の方が大きい			自己像の方が小さい			自然な大きさ			F値
	N	M	SD	N	M	SD		N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	
友達との関係-理想と現実のずれ得点	32	1.91	0.80	145	1.91	0.82	0.06	友達との関係-理想と現実のずれ得点	12	1.47	0.52	9	2.56	0.58	156	1.91	0.82	4.76*		
先生との関係-理想と現実のずれ得点	26	1.72	0.68	115	2.31	1.02	3.50**	先生との関係-理想と現実のずれ得点	7	1.90	0.85	6	2.89	1.17	128	2.18	0.99	1.78		
クラス-理想と現実のずれ得点	32	2.04	0.92	148	2.19	0.94	0.85	クラス-理想と現実のずれ得点	11	1.64	0.84	10	2.67	1.28	159	2.17	0.90	3.28*		
多重比較 友達との関係及びクラスにおいて、自己像の方が大きい<自己像の方が小さい																				
(自己像の区分化)	区分化なし・自然な区分化			不自然な区分化			t値	(友達像の有無)			友達像あり			友達像なし			t値			
	N	M	SD	N	M	SD		N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD				
友達との関係-理想と現実のずれ得点	187	1.92	0.82	2	1.83	0.24	0.16	友達との関係-理想と現実のずれ得点	188	1.94	0.82	6	1.94	0.85	0.02					
先生との関係-理想と現実のずれ得点	148	2.22	0.98	2	1.50	0.71	1.04	先生との関係-理想と現実のずれ得点	150	2.20	0.98	4	2.25	0.83	0.11					
クラス-理想と現実のずれ得点	190	2.20	0.93	2	2.00	0.00	2.91**	クラス-理想と現実のずれ得点	191	2.17	0.92	5	3.27	0.64	3.72*					
(友達像の有無) 身体部分の省略)	省略なし・自然な省略			不自然な省略			t値	(先生像の身体部分の省略)			省略なし・自然な省略			不自然な省略			t値			
	N	M	SD	N	M	SD		N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD				
友達との関係-理想と現実のずれ得点	167	1.94	0.80	19	1.81	0.86	0.66	友達との関係-理想と現実のずれ得点	174	1.98	0.82	14	1.26	0.37	6.08***					
先生との関係-理想と現実のずれ得点	132	2.15	0.97	16	2.73	1.00	2.21*	先生との関係-理想と現実のずれ得点	138	2.18	1.00	11	2.33	0.87	0.51					
クラス-理想と現実のずれ得点	169	2.16	0.92	18	2.20	1.01	0.18	クラス-理想と現実のずれ得点	176	2.22	0.93	13	1.77	0.77	1.68					

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

テキストマイニングによる分析を行った。自由記述を形態素解析し、出現パターンの似た語を線で結んだ共起ネットワークを作成した。なお分析においては、語の最小出現数を2、描画する共起関係は描画数を30に設定した。出現数の多い語ほど大きい円で描画されている。

### 結果と考察

分析対象者は研究Iと同様であった。結果は、例えば「友達像の有無」について、友達あり群は「楽しい」、「明るい」などが、友達なし群は「話」、「聞く」、「余裕」などが理想のクラスに対する自由記述の特徴語であり、「理想と現実のずれ得点」が有意に高いとされた描画特徴を描いた児童と、有意に低いとされた描画特徴を描いた児童とでは特徴語が異なった。また、「理想と現実のずれ得点」が有意に高いとされた描画特徴を描いた児童は、自由記述の内容から、友達に自己開示できない、先生と気軽に親しく話すことができない、先生など周囲の人から評価されないクラスに属している、と認識している可能性が示唆された。このような状態が児童の学校適応に関係することは十分に考えられる。従って、児童の学校適応を学校における理想と現実のずれという視点から把握する妥当性がある程度示されたと考えられる。

### 研究Ⅲ

特徴的なKSDを描いた児童2名を取り上げ、学校における理想と現実のずれとの関連を質的に検討する。

**KSDの抽出方法** 研究Iにおいて「理想と現実のずれ得点」が有意に高かった描画特徴が、他の児童と比べ最も見られなかった描画者Aを事例1、最も多く見られた描画者Bを事例2とした。

### 結果と考察

**事例1** 描画者Aは、3側面全ての「理想と現実のずれ得点」が1点台と低かった。描かれたKSDは、友達像があり、自己像と先生像の距離が近く、友達像の身体部分には自然な省略がみられ、研究Iの結果と一致した。理想に関する自由記述においてはどの側面においても、仲良く助け合い、悪いところは注意するという内容が書かれていた。描かれたKSDは自己像、先生像、友達像全員が笑顔で楽しそうに会話しており、KSDと学校における理想と現実のずれとの対応がみられた。

**事例2** 描画者Bは、3側面全ての「理想と現実のずれ得点」が3、4点台と高かった。KSDは、自己像と先生像の距離は声が届く程度の距離(中距離)であり、先生像の身体部分の省略はなく、研究Iの結果と一致した。理想の自由記述からは、先生ともっと親しくなりたいと思っていること、友達あるいはクラスにおいて「仲間はずれ」などネガティブなことが起こっていると認識していることが考えられた。描かれたKSDも、授業場面であり各人物像の関わりが薄く空虚な印象を受け、KSDと学校における理想と現実のずれとの対応がみられた。

### 総合考察

本研究は、先行研究における課題を解消するような方法をとった。従って、どのようなKSDの描画特徴が児童の学校適応を表すのかについての知見や、KSDを学校現場において活用するための知見をより精査、蓄積できたと考える。本研究の結果をもとにKSDのチェックリストを作成すれば、KSDは教師も用いることができるような簡便さが備わり、学校現場における有用性はより高まるであろう。